

文部科学省と国立大学附置研究所・センター 個別定例ランチミーティング

第20回 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 (2022.10.28)

- 12:05 – 12:10 (5分) : **アジア・アフリカ言語文化研究所の概要**
星 泉 所長
- 12:10 – 12:25 (15分) : **記述と記録を基盤に言語動態をとらえる**
—DDDlingプロジェクト
山越 康裕 准教授
- 12:25 – 12:45 (20分) : **質疑応答**



東京外国語大学アジア・ア
Research Institute for Languages



ILC

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文
Research Institute for Languages and Cultures of Asia



ILCAA

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

2018

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA研)

アジア・アフリカ言語文化研究所の沿革

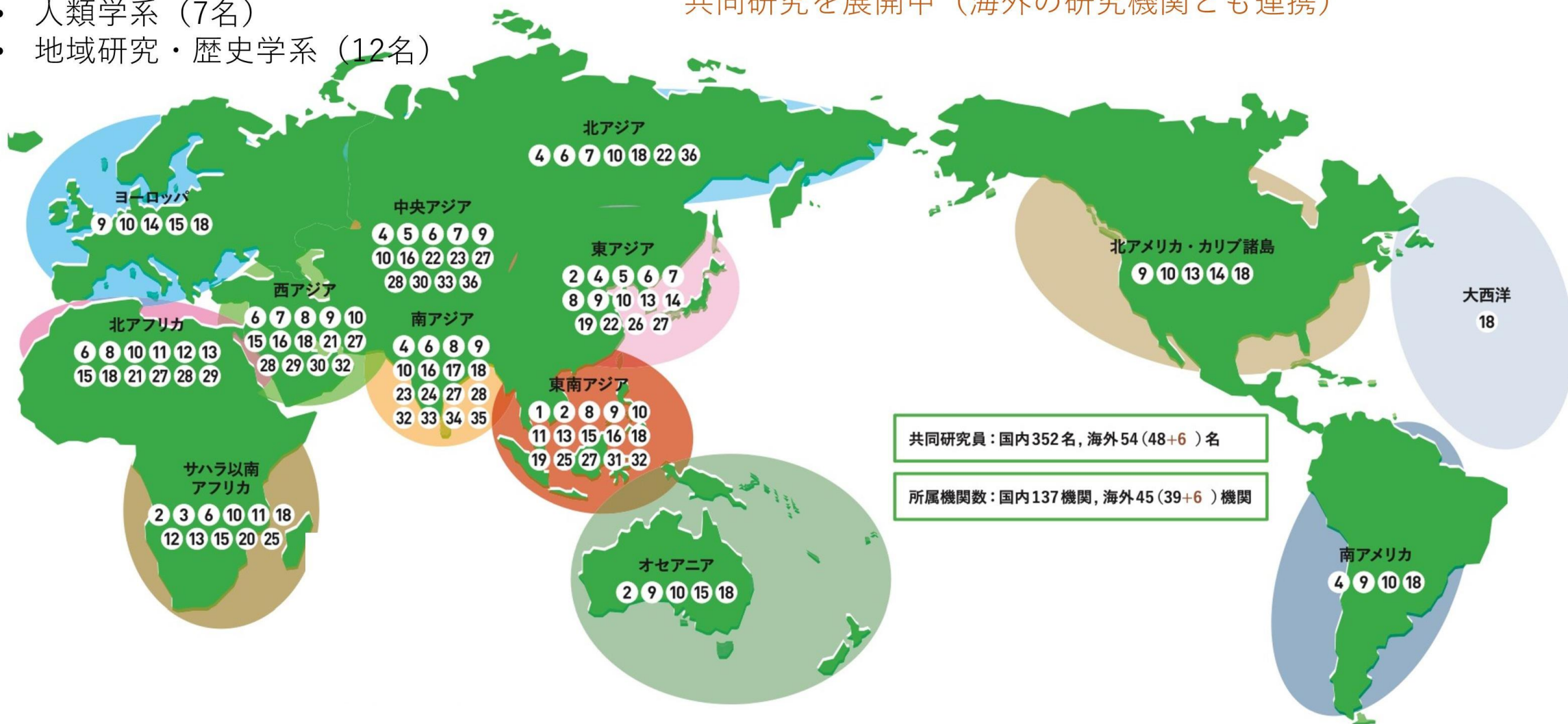
- 1961年に日本学術会議が**アジア・アフリカ諸国**についての研究を進めるための**共同利用研究所**を設立するよう政府に勧告
- 1964年に**アジア・アフリカ言語文化研究所**設立（言語学、人類学、歴史学・地域研究）
- 1997年からアジア・アフリカの研究資料の**デジタル化と公開、その手法研究**に取り組む
- 2005年から文理を問わずさまざまな学問の領域を横断する研究領域として**フィールドサイエンス（臨地研究、現地学）の構築**に取り組む
- 2010年以降、共同利用・共同研究拠点（拠点名：アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究拠点）として活動
- 2022年10月、本研究所がプロデュースする新組織**TUFSフィールドサイエンスコモンズ**を立ち上げ（デジタル技術を駆使したフィールドサイエンスの先端的应用研究を目指す）

AA研の共同研究の状況 (36研究課題が研究対象とする地域)

所員数33名 (2021年4月時点)

- ・ 言語学系 (14名)
- ・ 人類学系 (7名)
- ・ 地域研究・歴史学系 (12名)

アジア・アフリカを中心とした世界諸地域に関する
共同研究を展開中 (海外の研究機関とも連携)



研究連携ネットワークと国際共同研究

文理のフィールドワーカーの出会いの場

◆海外学術調査フォーラム

文理の研究者に開かれた
フィールドサイエンスを
テーマとした研究集会
ネットワーキングの場
毎年6月に開催



◆フィールドネット

フィールドや研究上の
交流を行う場
700名を超える研究者が
参加、若手支援の場



2つの海外拠点を活用した国際共同研究

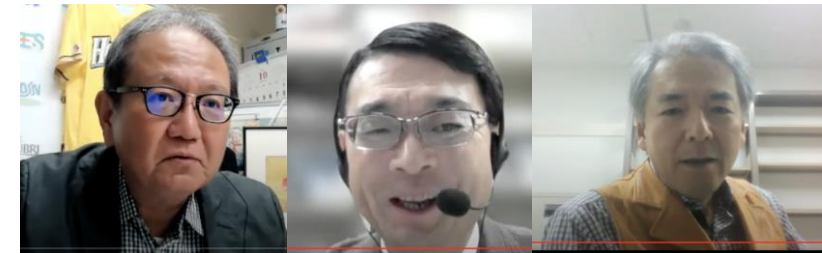
◆中東日本研究センター（レバノン）

◆コタキナバル・リエゾンオフィス（マレーシア）



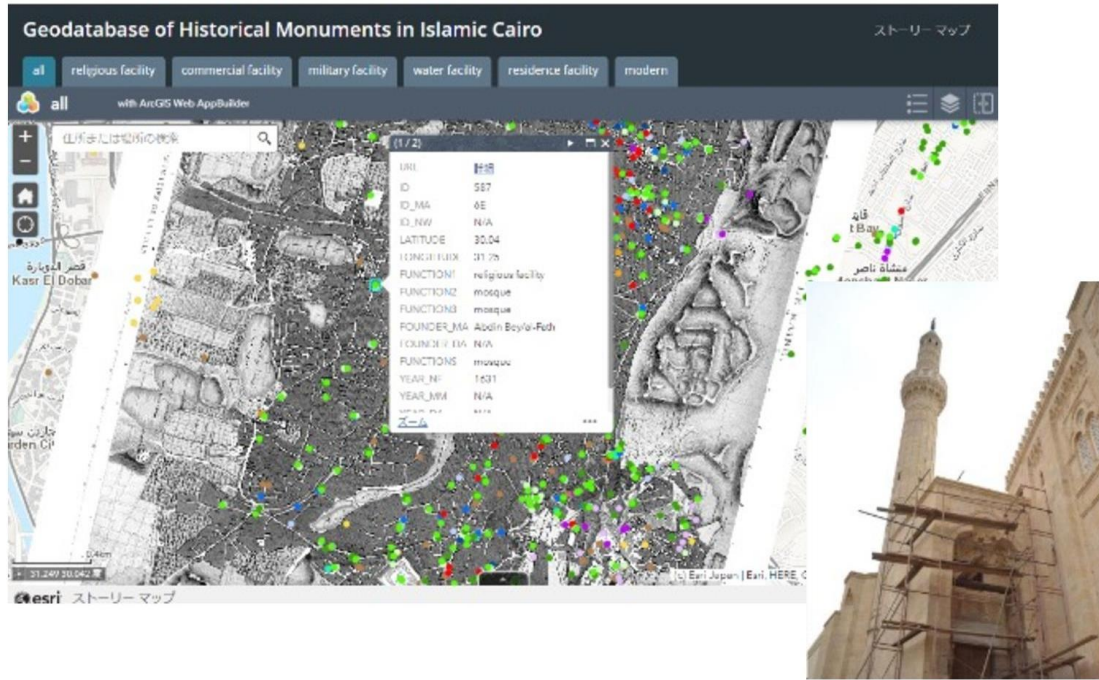
地域研究の戦略的発展のためのパートナーシップ協定

わが国の地域研究の戦略的発展を目的とし、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、京都大学東南アジア地域研究研究所と2022年4月に締結。クロスアポイントメント制度を活用して連携。10/7にはロシアのウクライナ侵攻をテーマとした3拠点主催の記念セミナーをオンラインで実施。



データベース構築による異分野協働の推進

(例1)カイロのイスラーム建築データベース



エジプト・アラブ共和国の首都カイロにあるイスラーム建築史跡の画像のデータベース化のための異分野協働

- ・イスラーム地域研究（建築史）の専門家がリーダー
- ・エジプト史（環境史）の専門家
- ・デジタルヒューマニティーズの専門家

(例2)チベット牧畜文化の記録・保存データベース



チベット牧畜文化の記録・保存とマルチメディア辞典の編纂、百科事典の構築のための異分野協働

- ・言語学（チベット語）の専門家がリーダー
- ・人類学、宗教学、歴史学など人文系の専門家
- ・牧野生態学、地理学などの理系の専門家

AA研の第4期のミッション

アジア・アフリカの人々とともに新たな共生社会のあり方を考える
プラットフォームをつくる（TUFSフィールドサイエンスコモンズ発足）

フィールドサイエンスにもとづき、世界の人々、特にアジア・アフリカの人々の
「信頼」「寛容」の機序を探り、新たな時代の共生社会のあり方を構想する

継承してきた下記の3つのミッションを新たな形で展開させていく

臨地研究にもとづく国際的な共同研究の推進

研究資源の収集・分析・編纂および成果の発信

研修・セミナーを通した次世代研究者養成



異分野協働体制による研究



フィールドサイエンスの先端的応用研究

デジタル技術の活用により現地の人々とともに記録活動



対話の場をつくり社会の行動変容を促す

TUFSフィールドサイエンスコモンズとは

東京外国語大学



世界各地にフィールドをもつ研究者を擁し
多言語多文化共生社会の実現を目指す

アジア・アフリカ言語文化研究所



フィールドサイエンスの各種ネットワーク、
多数の共同研究の実績、デジタルリソースの蓄積



TUFiSCo (TUFS Field Science Commons)

異分野協働研究体制によりデジタル技術を駆使した先端的応用研究で
現地社会と我が国の市民社会と共に新たな共生の未来を創る



DDD
DDDLing
ILCAA

AA
ILCAA
Research Institute for
Languages and Cultures of
Asia and Africa

Description

Documentation

Language Dynamics

記述と記録を基盤に言語動態をとらえる —DDDLingプロジェクト



山越康裕（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：AA研）

第20回 文部科学省と国立大学附置研究所・センター 個別定例ランチミーティング（2022-10-28）



Research Institute for
Languages and Cultures of
Asia and Africa

AA研基幹研究（言語学／2022-2027） 「アジア・アフリカの言語動態の記述と記録：

アジア・アフリカに生きる人々の言語・文化への深い理解を目指して」

Description and Documentation of Language Dynamics in Asia and Africa:

Toward a More In-depth Understanding of the Languages and Cultures of People Living in Asia and Africa

DDDLing



設立時の理念：アジア・アフリカ諸地域を対象とした学術研究機関設置構想
地域研究においては言語にウェイトを置かなければ他のディシプリンは展開できない
諸言語の辞典編纂／教育・訓練／付随する理論と方法の開発

一言語からの情報では
多面的に事象をとらえ
ることは困難

研究未開発言語を対象とした言語学の基本が「記述研究（記述言語学）」
実際の言語運用場面で話者と対面し、データを集め、分析し

人文科学だけでなく、
社会科学でも言語を理
解することは重要

文法・辞書・言語資料

の3点セットの整備をめざす

言語学は時代とともに細分化が進むが、**記述言語学**はその他の言語学各分野の「**基盤**」

得られた成果が**言語構造の普遍性**
や多様性の解明（＝「**言語**」とは何か、の解明）に貢献・寄与

アジア・アフリカ地域を対象 とした言語学の 基礎的研究の推進

- ・アジア・アフリカ基礎語彙集
- ・市販外国語辞典の編纂
- ・記述文法書の刊行
- ・言語資料の整理と公開



アジア・アフリカ地域

- ・とくに言語の**多様性に富む**
- ・圧倒的多数が**無文字言語**
- ・多くが**3点セット未整備**

地道な言語の記述を継続して
おこなう必要がある

現地調査が不可欠

無文字言語が圧倒的に多いため、文字化された資料は少ない
話者と向き合い、その背景となる文化も見ないと分析できない言語事象もある

話者による生の発話からその言語の音声の仕組み、文法の仕組みを分析

→「終わり」がない
より細部にわたって分析を進めるとなると、生涯かけて一言語のみの記述に携わるケースも珍しくない（むしろそのようなケースが多い）

「未知の機械を調べ、分解し、構造を描写し、組み立て、他者が運用できるようにする」イメージ

- 設計図はない
- 既存の機械に似ている場合も、全く未知の場合もある
- 現在約7,000あるという言語はそれぞれすべて構造が異なる

技術の進化に伴って急激に研究が進展するというものではない

機材の小型化・軽量化や方法論の整備によって効率化はされている
話者とのコミュニケーションを通じて分析していく手法には変わりはないため、
得られる**データ量は急激には増えない**（データが多いほど記述は精緻になるのだが）

しかし

言語構造の普遍性や多様性の解明（＝「言語」とは何か、の解明）には必要

- 国内の言語だけ研究していても「『言語』とは何か」は見てこないのは自明
- 海外をフィールドとする日本の記述言語学は国際的に見ても（欧米と並び）トップレベルにある
- AA研はそのアジア・アフリカ地域の拠点として、海外からも多くの客員研究員を招聘し研究を推進してきたほか、大学院の垣根を越えて次世代養成にも努めてきた

消滅危機言語を主たる対象に

さまざまな言語運用の場面を**包括的に記録**

※記述言語学の手法の中で「記録」もおこなわれるが、さらに範囲を広げる

記述研究者個人が大量のデータを記録することの限界
できるだけ早くデータを記録する必要性

話者みずからが記録活動に参加

話者による「記録」を促すには**動機付けも必要**
・言語の「価値」の認識

(録音・録画の) **機材と環境、基本的技法**が整えば**研究者でなくとも実践可能**

「記録」されたデータが多ければ多い＝正確な「記述」にも結びつく／将来の再活性化にも必要

「記述」のためだけではなく、理論的研究や、将来的には自動翻訳に向けた機械学習のデータとしても有益

言語の記述と記録を推進するアジア・アフリカ地域における重要な**研究機関**



・包括的記録の技法と理念を学ぶワークショップを国内外で展開

・アジア・アフリカ・ヨーロッパの諸研究機関との連携によるワークショップ（インドネシア、モンゴル、ロシア、タイ、タンザニア、etc.）

・国立国語研究所との連携による**危機方言調査**のためのワークショップ

AA研の言語学 三つの柱



Descriptive Linguistics 基盤となる 記述言語学

- アジア・アフリカ基礎語彙集
- 市販外国語辞典の編纂
- 記述文法書の刊行
- 各種言語事象に関する諸論文公刊
- 語学教育

- AA研オンラインリソースとして公開
- 国際的な言語データアーカイブへの登録
- WSを通じた話者による記録活動の活性化



消滅危機言語を対象とした 包括的 記録

Language Documentation

話者コミュニティへの 再活性化 支援

Revitalization

- 話者向けの辞典編纂
- 紙芝居動画のオンライン展開
- 絵本刊行

海外展開

- 海外研究機関との共同研究
- 当該言語話者コミュニティとの協働による再活性化活動

国内還元

- 日本語諸方言・国内諸言語研究への還元
- 記録手法のWS提供

報告者のケース



- 中国・内モンゴル自治区北部におけるシネヘン・ブリヤート語（モンゴル諸語）の記述と記録に従事
 - 1918～32年までに旧ソ連から亡命・移住した集団1,500名程度の子孫（現在は約7,000名）が話者

記述言語学

- 文法概略記述
- 基礎語彙リスト
- 言語資料

包括的記錄

- 他のモンゴル系言語を含め比較対照可能とした語彙データベース
- 音声資料データベース

再活性化

- 「記録」したデータをも
とにした絵本製作および
動画公開

[illegible]

モンゴル諸語テキスト資料集成 Online text of Mongolic languages

— About Shinekhen Buryat

序文	1	2	3	4	5	6
	user-ri	beer-ig	age-zhe	xii-dag.		
	cow-GEN	kidney-ACC	do.like.this-CVB.IPVV		tab-FTCF.HIT	

牛の腎臓のことをこうやって言う。

People call cow's kidney like this.

「あまもり」こわい

—ブリヤートの民話

監修・モンゴル語・日本語：山越康裕
絵：ハリヤ
【語り・原案：ガルゾート・ツェ・ドガルマー】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

AA Lingpi

他のプロジェクトメンバーのケース

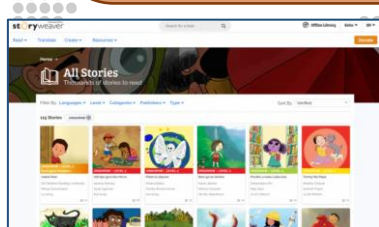
再活性化



包括的記録



記述言語学



これから

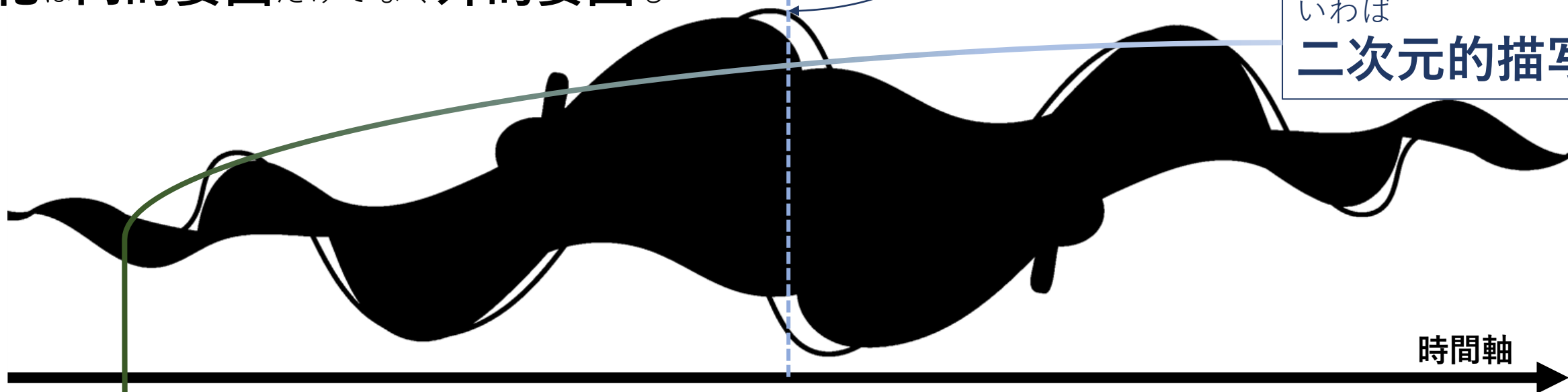
記述言語学



言語は機械のようではいて可変・動的なものとくに時代とともに変化
変化は内的要因だけでなく外的要因も

絶えず変化する言語の、ある1時点での様相を体系的に記述するのが原則
(CTスキャンやMRI画像をイメージするとよい)

いわば
二次元的描写



より立体的に描写するためには…

時間軸上のさまざまな時点でのデータ拡充＝

多層的包括的記録

+

さらに 周辺分野との共同研究

も変化要因を探るうえで重要

包括的記録

- ・話者コミュニティとの協働によるさらなる生きたデータの拡充
- ・DHにもとづき文献言語資料も「記録」



周辺分野との共同研究

- (所内) 文献言語を対象とした研究
- (所内) 人類学・地域研究
- (所外) 社会言語学・自然科学

話者の自然談話が「証言」として
他分野の貴重な資料となることも

さらに

- ・横断的なデータ活用を可能にするための規格策定と整備
- ・国内社会へのアウトリーチ

記述と記録を基盤に言語動態をとらえる研究を継続するために



記述言語学

包括的記録

における言語の危機ではなく 言語研究の危機

COVID-19による現地調査の制限（消滅危機言語の調査は多くの場合高齢者対象）

- 記述研究をリードしてきた日本のアドバンテージ減少
- 若手研究者の急減（調査ができない＝学位論文が書けない）
 - ひとつの分野が縮小した場合、
もとのレベルに再度押し上げるためにはより大きいエネルギーが必要

成果主義にはマッチしにくい
だが、

世界に伍するレベルに留まっている分野を
縮小させない努力と支援が必要